

## 南進の基地臺灣

鹿児島を距る西南六四一哩、本土の最南端に位する臺灣は、大東亞戦争の進展と共に俄かにその重要性を増してきた。

大南洋と云ふ一大熱帯圏を指導經營すべき使命を帯びた日本にとつて、臺灣は實に南進の據點であり、好個の實驗室であり、發電所である。

馬來、ボルネオ、東印度、ニューギニヤへの文化的、産業的進出に必要な總る實驗は、此の身近かな臺灣に於いて十分にこれを行ふことが出来る。このことは工藝産業に於いても同様である。

臺灣の工藝産業は、原材料に恵まれて居るにも不拘、概して未發達の状態にあるが、木竹、編組、金工、染織等に亘つて一通りの技術は具つて居り、高砂族や漢民族の傳統も依然として保持されて居る。斯かる現状は南方諸地域の實狀に相通ずるものがあり、これを如何に指導育成すべきかは大きな問題である。

決戦下の今日にあつては、軍需上、國民生活上緊要とするものを眞先に活用しなければならぬことは云ふまでもないが、しかも尙、我々は常に共榮圏の工藝建設に通ずる大道を忘れてはならない。

斯かる意味に於いて今日、臺灣の造形文化に對する關心がたかまり、現地に於いてもこれが振興の機運が起りつゝあることは寔に欣快に堪えない。

此の機會に一般工藝人の台灣工藝に對する認識を深め、南方研究の一助にもと茲に臺灣特輯號を編んで江湖に贈る次第である。